

2) 生物農薬（病害防除剤）

（1）非病原性エルビニア・カロトボーラによる軟腐病の防除

イ）商品名：バイオキーパー水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	10a当り散布液量	使用時期	使用回数	使用方法
野菜類（かぼ ちや、ズッキ ーニを除く）	軟腐病	500～2,000倍	150～300ℓ	発病前～ 発病初期	－	散 布
シクラメン		1,000倍				
ばれいしょ		1,000～2,000倍				
		16倍	3.2ℓ			無人ヘリコプターによる散布
かんきつ	かいよう病	1,000倍	200～700ℓ			散布

- ・細菌の生菌製剤。この製剤（細菌）は、耐久器官を形成しないため、物理的、化学的ストレスに弱く使用方法と保存方法に注意を要する。
- ・各作物とも使用時期が遅れると効果が劣るので、発病前からの予防散布が効果的である。
- ・他の軟腐病防除剤との交互散布は可能であるが、その場合は3日以上あけて散布する。
- ・軟腐病菌に効果のある殺菌剤、乳剤および特定の展着剤（ニーズ）との混用はできない。
- ・有効成分は生菌であるため、開封後は全て使いきる。
- ・散布後、長期間日照りが続く場合は、効果が劣ることがあるので、再度散布することが望ましい。
- ・5℃以下では4年間の保存可能であるが、25℃では有効期限が3か月になる。直射日光を避け、なるべく冷温所に保存する。

（2）バチルス・ズブチリス（枯草菌）による病害の防除

イ）商品名：ボトキラー水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	10a当り散布液量	使用時期	使用回数	使用方法
野菜類	うどんこ病 灰色かび病	1,000倍	150～300ℓ	発病前～ 発病初期	－	散 布
ぶどう	灰色かび病		200～700ℓ			
かんきつ マンゴー				開花期～ 幼果期		
なし	黒星病			発病前～ 発病初期		

作物名	適用病害虫名	10a当り使用量	10a当り使用液量	使用時期	使用回数	使用方法
野菜類	灰色かび病	300g	6～10ℓ	発病前～ 発病初期	－	常温煙霧

作物名	適用病害虫名	10a当り散布液量または使用量	使用時期	使用回数	使用方法
野菜類	うどんこ病	15g/日	発病前～ 発病初期	—	ダクト内投入
	灰色かび病				
花き類・観葉植物					

ロ) 商品名：エコショット

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	10a当り散布液量	使用時期	使用回数	使用方法
野菜類	灰色かび病	1,000～	100～300ℓ	収穫前日 まで	—	散 布
トマト、ミニトマト	葉かび病	2,000倍				
にら	白斑葉枯病	2,000倍				
ぶどう	灰色かび病	1,000～	200～700ℓ	開花期～ 落弁期		
かんきつ		2,000倍				
ブルーベリー ハスカップ		2,000倍				
なし	黒星病			収穫前日 まで		

ハ) 商品名：バイオワーク水和剤

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	10a当り散布液量	使用時期	使用回数	使用方法
野菜類（トマト、ミニ トマトを除く）	うどんこ病	1,000倍	100～300ℓ	発病前～ 発病初期	—	散 布
	灰色かび病					
トマト、ミニトマト	葉かび病					

- ・細菌の生菌製剤（耐久器官の芽胞製剤）は、物理的、化学的ストレスに強く保存に優れている。
- ・有効成分は生菌であるので、散布液調製後はできるだけ速やかに散布する。また、開封後は密封して保管し、できるだけ早く使い切る。
- ・保護作用が強く予防効果が主体なので、散布処理を行う場合には発病前～発病初期に7～10日間隔で散布する。なお、生育の早い作物に使用する場合には散布頻度を高めるなどの工夫をする。
- ・低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保される施設内で使用する。
- ・他剤と混用すると十分に効果が発揮されない場合があるので注意する。
- ・散布量は対象作物の生育段階、栽培形態及び散布方法に合わせ調節する。
- ・使用により葉及び果実などに汚れが生ずる恐れがあるので、収穫期の使用には気をつける。
- ・ダクトによる散布中はハウス内へ入らない。また、ダクトによる散布終了後はハウスを開放し、十分換気した後に入室する。
- ・ダクトによる散布を行う場合は、暖房機が数時間以上運転される条件下で実施する。